

ロンドン大会 (1896) における マラテスタとアナキスト

「反權威主義的」インターナショナルは、一八七七年のヴェルヴィエ(ベル)大会のち、同質性の欠如のために消滅した。一八八一年に、アナキストたちは、ロンドンでの国際大会に集結して、純粹にアナキズム的なインターナショナルを創立しようとした。しかし、マラテスタからなされた提案(九ページを見よ)は、特にフランスのアナキストたちが組織への嫌悪を表明したために、失敗に帰する。マラテスタは、それにもかかわらず落胆しなかった。一八八四年に彼は、彼によれば同時に「共産主義的な、アナキズム的な、反宗教的な、革命的な、そして反議會主義的な」ものであらねばならない、新しいインターナショナル創設をふたたび提案する。しかし、この計画はなかなか実現しなかったし、アナキストたちは、改良主義者たちがつねに組込みを拡大するのに成功していた労働者大衆から、次第に離反していった。一八八九年、諸国の社会民主主義者たちは、第二インターナショナルになるはずのものへの道を開くために、パリに参集した。この集會に出席した若干のアナキストたちは、そこで冷遇され、劇的な突発事件が起きた。数々の力を持つ社会民主主義者たちは、絶対自由主義者の側からのいさゝいの抗弁を圧殺したのである。

一八九一年のブリュッセルの国際社会主義者大会においても混乱があり、そこからアナキストたちは、嘲罵の声を浴びて追出された。しかしながら、こんどは、イギリス、オランダ、イタリアの、労働者代表のかなりの部分が、抗議のために退場した。

一八九三年にチューリッヒで行なわれた次の大会では、社会民主主義者たちは、慎重に、組合組織のほかは、彼らが普通選挙による権力の制覇と理解していた、政治行動の必要を認める社会主義の党とグループの人々しか、以後は受け入れないことを決定した。

一八九六年七月に、ロンドンで新しい国際社会主義者大会が開かれた時、若干のフランスとイタリアのアナキストたちは、労働組合の代表としてそこに参加することを巧妙にも考えた。しかし、障害を回避する方法は、改良主義者たちの不機嫌を和らげはしなかった。改良主義者たちの行動は、以下の文書の抄録がそれを際立てているように、醜態以外のものではなかった。

そんなわけで、絶対自由主義的著作家ウィクトル・セルジュは、「アナキズムは、十九世紀末の社会主義の腐敗に対する、この上なく健康な反動であった」と書く。レーニンはこの見解に与するどころではなかったが。

追記。以下の文書の大半は、「一九〇七年のアナキスト国際大会報告(一九〇八年、パリ)へのポール・ドレザルの歴史的な序文と、オーギュスタン・アモンの書『ロンドン大会の社会主義者たち』、一八九七年、からの抜粋である。

ポール・ドレザル
フランスでは、アナキストと社会民主主義者の離反は、一八八〇年から始まる。その前年、マルセイユの大会では、あらゆる傾向が入りまじっていた。現実主義者、集産主義者、アナキストが、同じ旗の下に並んでいた。

ユージェヌ・フルニエール
われわれはその時、極端に薄い、むしろ観念的な、むしろ言葉の上の仕切りによって、アナキストたちと別れた。……『平等』のグループの中にすら、一八八〇年までアナキストたちがいた。彼らは、若い労働者党が選挙活動に入ることを決定したその時にしか、われわれを離れなかった。そして、カール・マルクスの口述するままにロンドンで起草され、「ブスワ」マロンによってわれわれの承認を求めため提案され、アナキストと「社会主義者」との間の分裂を成就させた綱領が採用されたのは、(一八八〇年十一月の)ル・アール大会においてであった。

ポール・ドレザル
離反は決定的であったし、すべての国のアナキストと社会民主主義者に、急速に波及することとなった。しかしながら、アナキストたちは、あるいはもつと正確には、彼らのうちのあるものは、普遍的な社会主義の大家

族と精神的に結びつくことを、どうあっても、決して止めなかった。したがって、一八八九年にパリで、一八九一年にブリュッセルで、社会民主主義者たちが、国際社会主義者大会の開催を復活しようと努めた時、若干のアナキストたちは、そこに参加しようと思っていた。

彼らの出席は、そこで激烈な紛争をひき起こした。数々の力を持つ社会民主主義者たちは、彼らの敵対者たちのいさゝきの抗弁を圧殺し、嘲罵の声を浴びせて追出した。ベルナル・ラザールは、「イギリス、オランダ、イタリアのかなりの数の労働者代表が、抗議のために退場したことは事実である。しかしながら、勝利者たちはまだそれほど強力であるとは自覚していなかった。彼らはいかなる重要な決議をも可決せず、議会議題と政府与党との同盟の問題を、棚上げすることを選んだ。だが、多数派の態度は、自分たちはもはや経済闘争には専念せず、政治闘争に専念する、革命的行動のかわりに、自分たちは合法的な平和な行動を選ぶ、ということをはっきりと意味していた」と書いている(『パリの反響』、一八九六年七月)。

一八九三年にチューリッヒで開かれた次の国際大会で、社会民主主義者たちは、ついに(と、少なくとも彼らは信じた)、敵対者たちを追払うのに成功した。

チューリッヒ大会で決議され、一八九五年に廻された回章
あらゆる労働組合団体は、大会への参加を許されるで

あろう。労働者の組織の必要と政治活動の必要を認める、社会主義者の党と組織もまた。政治活動の意味を、人々は、労働者の組織が、政治的権利と立法の機構を、できるだけ使用するか征服するように努力し、そうすることによって、プロレタリアートの利益の勝利と政治権力の制覇を促進すること、と理解する。

ギユスターヴ・ルアネ^⑧

「アナキストたちの主張は、われわれのものと正反対である。……社会主義とアナキーとは、相容れない二つの言葉である」

ドメラ・ニューヴェンフユイスの記事

統一するかわりに、締めだす人たち、分裂させる人たちは、恥を知れ。世界は、一八七二年におけるマルクスとバクレーンの間の闘いのくり返しを見るであろう。それは、権威と自由との間の新しい闘争であろう。クロポトキン、ルクリュ、マラテスタ、チエルケーソフ、チプリアーニ^⑨のような人々、そしてほかの多くの大会から排除された人々を思い浮かべてみたまえ。諸君は、もはやそれは社会主義者大会ではなく、単に議会主義者の大会、社会民主主義者ら改良主義者の大会、一分派の大会であることを、認めなくてはならない。諸君がやりたいと思うことを選びたまえ。すなわち、社会主義者たちにかかわるあらゆる問題を討論するまじめな社会主義者たちの主張を認めないからである。

の主張を認めないからである。

フェルナン・ペルティエ——私は、労働取引所連盟を代表しつつ、経済活動は選挙活動にまざっているはずである、といたい。ジョレス氏はそれをよくご存じだが、労働者たちは、彼らの金が選挙活動に使われることを、絶対に望んでいない。

ギユスターヴ・ドロイ^⑩——アナキストたちはあらゆる組織の敵対者である。われわれはここに、組織し合うために、共同行動について理解し合うために、来ている。したがって、われわれが彼らを認めることはできない。

ジュール・ゲード——議会活動は、特に社会主義的原則である。その敵のための席はここにはない。まず政府を奪う必要がある……。それ以外には、瞞着しかない。その上、そこには裏切りがある。他の行動を夢みる人々は、別の大会を開くべきである。

ジャン・ジョレス——私は、チューリッヒ大会の基本的な決定、つまり政治活動の絶対的必要性を、はっきり支持することを諸君に要求する。

H・M・ハンドマン——アナキー、それは混乱である。それは、この大会に存在することを許されない。

ちの大会か、民衆の利益のために闘い苦しんだ多くの人々を、異端者として排除した分派主義者の大会か、を。

ポール・ドレザル

次の大会で（ロンドン、一八九六年七月二十六日—八月一日）、数多くのアナキストたちが、事実、もはやアナキストの資格ではなく、組合員の、組合会議所の代表の、資格で出席した（ジャン・グラヴィ、エトリコ・マラテスタ、エミール・ブージェ、フェルナン・ペルティエ、トルトリエ、ポール・ドレザル、等）。社会民主主義者たちが、敗色濃厚であった三日間の戦いののち、議会主義の「必要性」を公表することを拒む、同業組合のものであるとうと、いっさいの集団を以後の大会から排除するとうと、名高い決議を発表したのはこの時である。

一八九六年七月二十七日、ロンドン大会の会期の初めに、ポール・ドレザルは、演壇にのぼり、発言しようとした。通訳であったフランスの二学生は、彼の腰を両腕で抱きとめ、階段の下に彼を激しく突き落とした。彼はそこで打撲傷を負った。

ジャン・ジョレス^⑪——著しく意見を変えたアナキストたちが、その主張する革命的な集団を作るために組合の中に入ったとしても、われわれは、彼らを代表とした組織を排斥するであろう。なぜなら、われわれはアナキスト

ドメラ・ニューヴェンフユイス——大会がアナキストの大会でないこと、それは事実である。しかし、大会が社会民主主義者の大会ではないこともまた、事実である。すべての社会主義者は参集する権利がある。

ジャン・ジョレス——われわれは選出された社会主義者である。われわれは、四、五名の取るに足らぬ組合によって委任されたもの以上に、大会に参加する権利がある。

アレクサンドル・ミルラン^⑫——われわれは、彼らたち「アナキストたち」とのいささかの混淆をもちつきりと拒否する……。社会主義は、そのままのものであり、アナキズムと連帯しないという条件の下でしか、存在しえない。

ドメラ・ニューヴェンフユイス——われわれは退場する。われわれは、いく人かの野心家たちのこの上ない利益のために、社会民主主義によって演ぜられる喜劇に、これ以上長い間加わることを望まない。

H・ヴァン・コル——お達者で！

アウグスト・ペーベル——アナキストのように労働者た

ちに「もう投票するな」というところか、私は彼らにいうだろう、「もっと投票しろ、いつも投票しろ」と。

ウィルヘルム・リーフクネヒト——「次の大会のために」私は、どのような資格を呈示しようと、アナキストたちの排除を要求する。

オーギュスタン・アモンの注釈

討論は、……マルクス・エーヴリング夫人〔カール・マルクスの娘〕が通訳した時に……肝心な部分を取りのぞかれていた。

イギリス人たちは、つねに排除に賛成した。彼らは、あらゆる組織の、あらゆる秩序の敵、個人主義的なアナキストたちを排除することを思い描いていた。彼らは、ダイナマイト使いと山賊とを追いだすことを思い描いていた。

この大会の特徴は、際限のない権威主義、……驚くべき不寛容……であった。

ドイツ人たちが運営責任者であった。彼らは、エーヴリング夫妻に助けられて、大会の真の主人であった。事務局は……リーフクネヒトが望んだことを決定した。

社会民主主義は、そのあるがままの姿、不寛容な、狭量な、ケイアー・ハーデがビスマルクふうと評したほどの、権威主義的な姿をさらした。

ライン河の彼方の社会主義者たちは、次第に社会主義

の原則を放棄しつつあった。彼らは、急進主義へと向かっていたのである。

それは、自動的な道であった。

エーヴリング夫人——アナキストたちはみな狂人だ。

ジャン・ジョレス

〔小共和国〕、一八九六年七月三十一日

アナキストたちと社会主義者たちの間では、いかなる協力も可能ではない。彼らは、錯誤の中での真摯さを認めないし、ブルジョア反動の大きな利益のために、組合の組織を破壊しているのと同様に大会を混乱させにくる。

大会に出席したアナキストたちの宣言抄

われわれは、労働運動全般に対する、また特にこの大会に対する、アナキストたちの立場がいかなるものかを十分に説明することは、有益であると考える。労働者にわれわれをいかかわしく思わせ、運動を牛耳ろうとして、社会民主主義者たちは、アナキストは社会主義者ではない、と断言した。

よろしい、アナキストと呼ばれることを好み、社会主義者であることを望まないアナキストたちがいるとしたら、彼らは確かに社会主義者大会で何一つなすべきことがない。彼らは、大会に参加することを真先に望まない

ものであらう。

しかしわれわれ、共産主義のない集産主義的アナキストであるわれわれは、階級と、あらゆる搾取と、人間による人間の支配の、完全な廃止を願う。

われわれは、土地とあらゆる生産と交換の手段が、過去のいく世代もの労働によって蓄積されたあらゆる富と同様に、全員が共産主義のただ中で働きつつ労働の所産を享受しうるために、現行の所有者からの収用によって、人間すべての共通の財産になることを願う。

われわれは、人間の間の競争と闘争とを、全員の幸福のための労働の中での、友愛と連帯とに代えることを願う。そしてアナキストたちは、議会的社会主義の誕生よりずっと以前から、この理想を普及し、この理想実現のために、イタリアやスペインのようないくつかの国で、すでに長年にわたって、闘い、苦しんできた。

十分事情に通じた善意のどんな人間が、われわれが社会主義者ではないと、あえて主張するのであらう。

われわれが、組織された努力によって労働者たちが彼らの権利を獲得することを望むから、われわれは社会主義者ではないのであらうか？ われわれは、何らかの政府の譲歩によって労働者たちが彼らの権利を手に入れるという、われわれによれば空想的な希望に、彼らが頼らないことを望んでいるからか？ われわれは、議会議主義が、プロレタリアにとって単に無力な武器であるばかりでなく、ブルジョアジーの抵抗がなくなるとも、その本質自

身からみて、全員の利益や意志を代表することはできないので、つねに一階級ないし一党の支配の機関であるはずだ、と信じているからか？ われわれは、新しい社会が、すべての利害関係者の直接の協力によって、周辺から中心に、自由に、自発的に、連帯の感情にうながされて、自然な社会的な必要の圧力の下に組織されねばならない、と信じているからなのか？ われわれは、この再組織が、選出されるか自ら自己を押し通す中央団体によって、命令だけの力でなされたとするれば、それは人工的な組織であることから始まり、すべての人々を抑えつけ、彼らに不満を抱かせ、自分たち自身のためにあらゆる種類の特権と独占権とをひとり占めする、職業的政治屋の新しい階級の創造に到達するであらう、と信じているからか？

更に多くの理由をもって、人は、われわれが最も論理的な最も完全な社会主義者である、と主張しうるであらう。なぜならわれわれは、各自のために、社会的な富へのその完全な参与だけではなく、社会的な力へのその参与をも、つまり、他のすべての人々と同様に、公事の管理に各自の影響力を感じさせる実際の能力をも、要求しているからである。

したがって、われわれは社会主義者である。それゆえ、われわれを排除することとなる大会は、労働者の社会主義者国際大会とは、適切には呼びえないことは明白である。それは、そこに受け入れられる、一ないし複数

の党派固有の名称を名のるべきであらう。そうであるなら、われわれの誰も、社会民主主義者大会ないし議会主義的社會主義者大会と名づけられた大会に、入りこもうとは考えないであらう。

労働者たちが資本主義への闘争の中で統一し連帯することを、資本主義社会に対するすべての敵は望んでいる。この闘争は、必然的に経済的な性格に属する。それは、われわれが政治問題の重要性を軽視していることを意味しない。われわれは、政府、国家はそれ自身悪であるばかりではなく、資本主義の武装した擁護者であると、確信しているのである。われわれは、本来の意味あるいは比喩的な意味で、憲兵の部隊を乗り越えることなしには、民衆は所有を手に入れることはできないであらうと考える。したがって、われわれはぜひとも、政府に對する政治闘争に専心しなくてはならない。

しかし、政治は、当然のことながら分裂の大きな原因である。多分そうであるのは、諸国における諸条件や気質の相違のためであり、一国の政治組織とその民衆の諸条件との間の関係は、きわめて複雑で、かなりとらえがたく、誰にとってもよく見えるやり方ではあまり扱いやすくはない、という事実によつているのであらう。事実、経済闘争ではたやすく統一し連帯しうる諸国の意識的な労働者たちが、政治のために数多くの分派に分裂しているのである。

したがって、自己の解放のために闘う労働者たちすべ

ての相互理解は、経済的分野でのみ行なわれうるのである。それこそ最も重要なことである。というのも、議会主義的な、あるいはプロレタリアートの革命的な、政治活動は、プロレタリアートが組織された自覚的な経済力を形成しないかぎり、やはり無力だからである。

唯一の政治的意見を労働運動に強制しようとするあらゆる企ては、運動の瓦解に到達するであらうし、経済的組織の進歩を妨げるであらう。

社会民主主義者たちは、労働者たちに彼ら独自の綱領を強制することを、明らかに狙っている。彼らは、彼らの党の決定を受け入れない人々に、人類の解放のために闘うことを禁じたいと思つていようである。

われわれは、異なる党や派が彼らの綱領を放棄することを要求しはしない——そんな要求をするどころではない。われわれはわれわれの思想に執着するし、われわれは、他の人々が彼らの思想に執着することを理解する。

われわれはただ、その存在理由のない分野に分裂を持ちこまないことを要求するだけである。われわれは、すべての労働者たちのために、政治思想の区別なく、兄弟たちが手に手をとって、ブルジョアジーと闘う権利を要求する。われわれは、各自が、この権利を理解し、同じように理解する人々と一致して闘うことを要求する。しかし、すべての人々が経済闘争では連帯することを要求する。

もし社会民主主義者たちが、彼らの組込みの企てに固

執しようとし、それによつて労働者たちの間に分裂の種を蒔こうとするなら、労働者たちはマルクスの偉大な言葉、万国の労働者、団結せよ！を願わくば理解し、勝たしめるように。

E・マラテスタ、A・アモン

マラテスタと一九〇七年八月二十四—三十一日の
アムステルダムでの国際アナキスト大会

その後、前述のように手を焼いたアナキストたちは、国際大会において社会民主主義者たちを相手にすることを断念した。彼らは、彼ら自身の大会を持つことを決定した。一九〇七年にアムステルダムで行なわれたものである。読者は、以下に、この会議の報告からの広汎な引用、ポール・ドレザルによつて編集された「社会広報」(パリ、一九〇八年)からの引用を見られるであらう。この大会の討議の他の引用は、ジャン・メトロンによつて「ラヴアンショールとアナキストたち」(コレクシオン・アルシヴ、一九六四年、一四一—一五八ページ)の中に再録されている。それらは、ここにはあげられていないがあとで(六三ページ以下)フェルナン・ベルティエによつて論じられる、サンジカリズムとアナキズムとの関係についての、モナットとマラテスタとの論争にかかりがある。

組織についての討議 (八月二十七日、火曜日)

アメデー・デュノワ²¹——アナキストの大部分が組織に對してのあらゆる思想に反対していた時代は、まだそれほど速くに過ぎ去つてはいない。当時なら、われわれが今

問題にしている計画は、彼らの間に無数の異議を巻き起こしたことであろう。発案者たちは、反動的な底意と權威主義的な狙いとを疑われて見られたことであろう。

それは、それぞれが孤立し、さらに労働者階級から孤立していたアナキストたちが、あらゆる社会的感情を失ったと見えた時代であった。そこではアナキズムは、個人の改革について絶え間ない訴えを行なっていて、古いブルジョア個人主義の最高の表現と、多くの人々には思われていた。

個人の行動、「個人の発意」は、それだけですべて事足りると見なされてきた。人々は、経済、生産や交換の現象の研究はどうでもいいものと見ていた。わが同志たちのあるものたちは、階級闘争の現実をいっさい否定し、現行社会の中に意見の対立をしか見ないのに同意していたし、彼らにとって「宣伝」とは、まさに個人を仕込むことであつた。

社会民主主義の日和見主義的な、権威主義的な傾向への抽象的な抗議であるかぎり、アナキズムは二十五年にわたつて重大な役割を果たしてきた。なぜ、それだけにしておくのではなく、議会主義的社會主義の面前で、自らに属する独自のイデオロギーを建設することを、アナキズムは試みなかったのか？ その大胆な高揚の中で、このイデオロギーは、あまりにもしばしば、現実と實際行動との堅い大地を見失い、またあまりにもしばしば、自ら望んでいるにせよ、個人主義という孤

立した岸に上陸することで終わった。そんなわけで、われわれの間では、「個人」にとつて必然的に抑圧的なものとしてしかもはや組織を考えず、あらゆる共同行動を型通りに排斥するにいたつた。しかしながら、まさにわれわれが今問題とされている、この組織の問題について、有意義な変化が成就されようとしつつある。疑いもなく、この個別的な変化は、アナキズムが数年来フランスで蒙つている全般的な変化と結合されなければならぬ。

かつてよりもずっと積極的に労働運動に加わりながら、われわれは、しごく簡単に不可侵のドグマに変貌する、純粹な思想を生きた現実から引き離していった距離を飛び越えた。われわれは、過去のわれわれの抽象的思想にだんだん関心がなくなり、次第に實際の運動への、行動への関心を増大させてきた。すなわち、サンジカリズムと反軍国主義は、われわれの心の中で最上位を占めた。アナキズムは、われわれには、哲学的な道徳的な教義の姿でよりもはるかに、革命理論として、社会転換の具体的な綱領として映る。われわれは、その中に、プロレタリア運動の諸傾向の中の最も完全な理論的表現を見れば足りるのである。

アナキストの組織は、今なお異議をよび起こす。しかし、この異議は、個人主義者からでたか、サンジカリストからでたか、によつて大いに違ふものである。

前者に対しては、アナキズムの歴史に訴えれば足りる。アナキズムは、発展の道をたどりながら、第一イン

ターナショナルの「集産主義」から、つまり、要するに、労働運動から生まれた。したがつてそれは、個人主義の最も完成した最新の形態ではない。そうではなく、革命的社會主義の諸様相の一つである。アナキズムが否定するもの、それはしたがつて組織ではない。全く反対に、それは政府であり、ブルードンがわれわれにいつているように、組織は政府とは相容れないものである。アナキズムは、個人主義的ではない。それは、最も、連合主義的であり、「提携主義的」なのである。人はそれを、完全な連合主義、と定義しよう。

それに、アナキストの組織が、いかにそのメンバーの個人的な発展を害しうるかを、人は見てはいない。事実誰も、そこに入ることも、そこに入ったままでないでいることも、強いられたわけではなからう。

アナキストの組織についてのわれわれの計画に對する、個人主義的な見地から提起される異議は、検討に耐えられるものではない。それらは、まったくそのまま、社会のあらゆる形体に對しても背を向けるものである。サンジカリストたちの異議は、それよりも根拠がある。しばらく、それらを見つめることにしよう。

明確に革命的な傾向を持つ労働運動の存在は、現在、フランスにおいては、アナキスト組織のあらゆる企てが、押しつぶされるのでなければ衝突する危険のある、重大な事実である。この歴史的な重大な事実、他国の同志諸君にはもう強いられていないと私には思われる、

いくつかの用心をわれわれに要求する。

人はわれわれにいう。「労働運動は、ほとんど無制限の行動の分野を諸君に提供している。諸君の思想集団、信者しか入れない小教会は、そのメンバーを無限に増大させることを希望しえないのに、組合組織、それは、その柔軟な流動性のある枠内で、全プロレタリアートを包含するにいたることを、あきらめてはいない」

「さて」と、人はつづける。「アナキストたち、諸君の場所は労働者の同盟の中にある。そこにしかない。労働者の同盟は単に闘争の組織ではない。それは、未来社会の生きた萌芽である。未来社会はわれわれが組合を変化させたものである。誤り、それは、教義の同じ問題をつねに考え直し、思想の同じ循環の中で果てしなくめぐる、消息通の間にとどまっていることである。いかなる口実の下であれ、民衆から離れてはならない。なぜなら、民衆がいかに遅れていようと、いかに視野が狭からうと、あらゆる革命の不可欠の指導者、それは——イデオログではなく——彼らであるからである。諸君は、社会民主主義者たちのように、主張すべきプロレタリアートの利害とは別の利害、党の利害、分派ないし徒党的利害を持つているのか？ 諸君のところによくべきなのはプロレタリアートなのか、それともプロレタリアートの生活を生きて、その信頼を獲得し、言葉と模範によつて、抵抗を、叛逆を、革命を彼らにうながすために彼らの下にゆくのが、諸君なのか？」

しかしながら私は、この異議がわれわれに対して意味がある、とは思わない。組織されているにせよいないにせよ、アナキストたちは（私は、プロレタリアートからアナキズムを引き離してはいない傾向の人々についていっている）、「至上の救世主」の役割を熱望していない。労働者の解放は労働者自身の仕事である、そうでなければありえない、とはるか以前から確信していて、われわれは、行動の順位の第一位に喜んで労働運動を置いている。それは、われわれにとって組合は、ゲード主義者たちや、彼らとともに遅れたアナキストたちが、時代遅れの決まり文句で理解しているように、単に同業組合的な、平凡に職業的な役割のみを果たすべきものではない、ということである。同業組合主義の時代はすぎた。その運動は、初めは、それよりも以前の諸観念に抵抗することができたのだが。

したがって、プロレタリアートの、最も進んだ、最も大胆な、最も解放された分派であると考えている、つねにプロレタリアートの側で闘う、われわれアナキストの役割は、プロレタリアートに加わって、同じ闘いを闘うことである。われわれとは別個に、われわれの研究グループの中には、われわれを孤立させる愚かな思想がある。組織されているにせよいないにせよ、われわれは、労働者階級の教育者であり刺激者であるという使命に忠実であるであらう。そして、もし今日われわれが同志間で結集しなければならぬと信するならば、それは、なか

て評価しうる成果をもたらした。しかし、今日ではもはやそうではない、とはっきりいう必要がある。

何年にもわたって、一種の危機がアナキズムを襲った。われわれの間での、理解と組織との、ほとんど完全な欠如が、この危機に大きなかわりを持っていった。フランスのアナキストたちは、きわめて多数である。理論的な面では、彼らはすではつきりと分裂している。実践的な面では、さらには一層そうである。各自は、好きな時に好きなことをしている。どんなに莫大なものであろうと、個人的な努力は、霧消するし、しばしば単なる喪失として浪費される。いたるところにアナキストはいらぬ。欠けているもの、それは、今日にいたるまで、孤立して闘われないさいの力を、共同の場に結集させる、アナキズム運動である。

このアナキズム運動は、われわれの共同の行動から、われわれの具体的な、調整された行動から生まれるのである。アナキスト組織は、時にまったく誤解してアナキズム思想を援用する、あらゆる人々を統一する意図を持つことはない、ととりたてていうこともあるまい。それは、実際行動の綱領の周りに、われわれの原則を承認し、われわれとともに働くことを望む、すべての同志たちを結集するものだ、といえは足りる。

大会において、個人主義的な傾向を代表する、アムステルダム の同志、H・クルワゼに発言の機会が与えられ

んずく、われわれの組合活動に、最大限の力と連続性を与えらるためである。われわれは結集しながらでしか強くないが、われわれが強くなればなるほど、われわれが労働運動を通じて指導しうる思潮もまた強くなるであらう。

しかし、わがアナキスト・グループは、闘士たちの教育を仕上げることに、彼らの中で革命的な精気を維持すること、彼らが相互に知り合い出会うことを可能にすることにだけに甘んじなければならぬのであろうか？ 直接に、われわれ独自の行動を行なうべきではないのか？ われわれは、すべきである、と考える。

社会革命は、大衆だけの仕事ではありえない。そうではなく、あらゆる革命は、それらの、いわば専門的な性格によって、少数者のみの、運動中のプロレタリア内での最も大胆な、最も教育のある分派のみの、仕事であるはずの行為を必然的に伴っている。各街区に、各市に、各地方に、わがグループは、革命期に、多数の大衆がするにしては多くの場合に不適当な、特別な微妙な措置の成就を目指す、小さな闘争組織を形成するであらう。

しかし、グループの基本的な恒久的な目標、それは、私はやつとそこに到達したが、アナキズムの宣伝である。確かに、何よりもまず、われわれの理論的な観念、われわれの直接行動と連合主義の方法とを宣伝するため、われわれは結集するであらう。今日まで、宣伝は個人的に行なわれてきた。個人的な宣伝は、かつてきわめ

る。

H・クルワゼ——他の何ごとよりも重要なこと、それは、私の論証の基礎となる、アナキーの定義を与えることである。われわれはアナキストである。それはわれわれが、以下のような社会状況、すなわち、その中で個人が自己の完全な自由の保証を見出すであらう、その中では各自が自己の生活を完全に生きるであらう、いかえれば、その中では、いかなる種類の拘束もなしに生きる事が個人に、あらゆる種類の生活が彼に、与えられ、もはや今日のように他人の生活——他人が個人に強制している生活を私はいたい——が与えられるのではない、そうした社会状況を樹立することをわれわれが望んでいる、という意味においてである。

私の金言は、われ、である。われ、われ、……その他のものは次である！

個人個人は、個人的に努力しても単独では目標に到達できない時にしか、提携してはならない。しかし、集団、組織は、いかなる口実の下であれ、そこに自由に加わった人々にとって、決して束縛となつてはならない。個人は社会のために作られてはいない。反対に、個人のために作られているのが社会である。

アナキーは、各個人に、あらゆる彼の能力を自由に発揮できるようにしようとする。さて、組織は、宿命的な結果として、つねに多かれ少なかれ、個人の自由を制

限するものである。したがって、アナキーは、あらゆる恒久的な組織制度に敵対している。実際にならうというむなししい野心によって、アナキストたちは、組織と和解している。それは、彼らが置かれた、微妙な危うい立場である。彼らは、いつの日か、社会民主主義者たちとまったく同様に、権威そのものと結局は和解するであろう！

アナキズム思想は、より実際的にならうとするよりもむしろ、その古い純粹さを保持しなければならぬ。したがって、われわれの思想の古い純粹さに復帰しよう。

ジークフリート・ナハト——私は、彼の立場に立ってクルワゼに追随する気持はない。特に明らかにしなければならぬと私に思われるもの、それは、アナキズムと、もっと正確にはアナキスト組織と、労働組合との関係である。われわれ、アナキストであるわれわれが、革命的な準備と教育の特殊なグループを組織しなければならぬのは、労働組合の任務を助長するためである。

労働運動は、現行社会によってプロレタリアートに与えられた生活条件から生まれた、独自のものである使命を持つてゐる。この使命、それは経済的力の制覇であり、生産と生活のあらゆる源泉の集団的横領である。それは、アナキズムが熱望しているものである。しかしながら、アナキズムは、その単なるイデオロギー宣伝集団だけでは、そこに到達しえないであろう。その宣伝がい

かによいものであろうと、理論は民衆のうちに根深くは浸透しない。民衆が自己教育するのは、何よりも行動によってである。行動は、少しずつ、民衆に革命的な意欲を与えるであろう。

ゼネラル・ストライキと直接行動の思想は、労働者大衆の意識に大きな魅惑を及ぼしている。それら大衆は、未来の革命の中で、いわば、革命軍の歩兵を構成するであろう。技術的な必要の中で専門化されている、われわれアナキスト・グループは、いつてみれば、砲兵を形成するであろう。それは、歩兵よりは少数であるが、しかし必要性が薄いわけではない。

ジョルジュ・トナル——アナキズム思想全体の中の共産主義と個人主義は、対等のものであり、離して考えられないものである。組織、共同の行動は、アナキズムの発展に不可欠のものであつて、われわれの理論的前提とは矛盾しない。組織は、手段であつて、原則ではない。しかし、それが受け入れられるものであるためには、絶対自由主義的に形成されなければならないこと、いうまでもない。

組織は、われわれが、みんな知り合い、絶えず会つていた、ごく少数のアナキストたちであつた時、無用のものでありえた。われわれは今や無数になつたし、われわれは、われわれの力を分散しないよう注意しなくてはならない。したがって、さらに、特に、直接行動のため

に、われわれを組織しよう。

私は、サンジカリズムに敵意を持つてゐるどころではない、特に、その傾向が革命的なものである時には。しかし、結局、労働者組織は、アナキストのものではない。したがつて、その中では、われわれは絶対的にわれわれ自身ではないであろう。われわれの行動は、そこでは完全にアナキスト的なものでは決してありえないであろう。そこから、われわれが、全員と各自の自由と意志との尊重にもとづく、絶対自由主義的な、集団と連合とを作る必要が生まれる。

ポブリジェック——私は、個人主義者の資格において、組織の根拠を弁護したい。アナキズムは、その原理から見て、組織を認めることはできない、と主張することは不可能である。個人主義者と自任しているものも、各個人間の提携を徹底的に非難しはしない。

人が時々そうするように、シュティルナーがクロポトキンか、というふうなこれら二人の思想家を対立させながらいうこと、それは誤りを犯すことである。クロポトキンとシュティルナーは、相互に対立するものではない。彼らは、同じ思想を違った観点から述べたのである。そこにすべてがある。人がそういつて楽しんでゐるように、マックス・シュティルナーが気違いじみた個人主義者ではなかつた証拠、それは彼が「組織」のために発言していることである。彼は一章全体を、「エゴイ

ストたちの提携」に当てさせた。

いかなる執行権力をも持たないわれわれの組織は、われわれの原則に反するものではないであろう。労働組合の中において、われわれは労働者の経済的利益を擁護する。しかし、それ以外のもののためには、われわれは、別に結集して、絶対自由主義的な基礎の上に組織を創設しなければならぬ。

エマ・ゴールドマン——私もまた、原則として組織に好意的である。しかしながら私は、組織がいつの日か排他主義に陥ることを恐れる。

デュノワは、個人主義の行きすぎについて語つた。しかし、この行きすぎは、真の個人主義とともに何一つ行なわれるべきものではない。同様に、共産主義の行きすぎも、真の共産主義とともにには行なわれるべきものではない。私は、報告の中で私の見方を述べたが、その結論は、組織はつねに、多かれ少なかれ、個人の人格を併呑しようとする、というものである。そこに、予見しなければならぬ危険がある。したがつて私は、それがあらゆる個人的な発意の絶対的な尊重にもとづき、個人の活動や発達を妨げないものであるという、ただ一つの条件の下でのみ、アナキスト組織を承認するであろう。アナキーの基本的原則、それは個人の自律である。インターナショナルは、この原則を完全に尊重する時のみ、アナキスト的なものであるであろう。

ピエール・ラムス——私は、あらゆる組織と、その方向に向かつてわれわれの間でなされるあらゆる努力に、好意的なものである。しかしながら、デュノワの報告の中に提出された議論は、望ましい性質のものであるとは、私には思えない。われわれは、ついさつき、クルワセが明らかにしたようなアナキストの原則に、立ち帰るよう努力をしなければならぬ。しかし同時にわれわれは、系統的にわれわれの運動を組織しなければならぬ。別な言葉でいえば、個人的な発意は集団の力に支えられ、集団はその表現を個人的な発意のうちに見出す必要がある。

しかし、実際にそうであるためには、われわれは、われわれの基本的な原則を純粹に手つけずに守らなくてはならない。その上、われわれは、新しいものを作りだすどころではない。現実には、われわれは、旧国際労働者協会の中で、マルクスに敵対し、クーニンとともにあった人々の、直接の継承者である。したがってわれわれは、新しいものを何一つもたらすのではない。われわれが最もしなければならぬこと、それは、いたるところで組織への傾向を助長しつつ、われわれの古くからの原則に新しい刺激を与えることである。

新しいインターナショナルの目的については、それは、革命的サンジカリズムの補助的な力を形成することであってはならない。それは、完全な形でのアナキズ

ムの普及のために活動することではなくてはならない。

エトリコ・マラテスタ——私は、組織の問題について私の前で語られたすべてを、注意深く聞いた。きわめて明確な私の印象、それは、われわれを分裂させているもの、それは、われわれが違った形で理解している言葉だ、ということである。われわれは自ら求めて言葉の争いをしている。しかし、問題の本質については、みな一致している、と私は確信している。

あらゆるアナキストたちは、彼らが属している傾向がどのようなものであれ、何らかの形で、個人主義者である。しかし、その逆は真実からは遠い。すべての個人主義者がアナキストである、ということは決してない。したがって、個人主義者たちは、きわめて対照的な二つの範疇に分けられる。ある人々は、すべての人間個人のために、自分のためにも他人のためにも、完全な発展を求める権利を要求する。他の人々は、ただ自分個人のことしか考えず、自分のために他人を犠牲にすることを決してためらわない。全ロシアのツアーは、この後者の個人主義者である。われわれは、前者に属する。

人はイブセンとともに、世界で最も強力な人間、それは最も孤独な人である、と叫ぶ。何となくナンセンスだ！ イブセンがその格言を語らせたストックマン博士は、言葉のあらゆる意味において、孤独者ではない。彼は、ロビンソンの島ではなく、組織された社会の中で暮

らしていた。「孤独な」人間にとつては、この上なくささやかな、有益な、生産的な仕事をすることも不可能である。もし誰かが自分の上に主人を必要としたとすれば、それはまさに孤立して暮らしている人である。個人を解放するもの、彼に彼のあらゆる能力を発展させることを可能とするもの、それは、孤独ではなく、提携である。

実際に有益な仕事を成就するためには、協力は、今日ではかつて以上に、欠くことができない。おそらく、提携は、それに加わる個人たちに、完全な自律の余地を残しておくはずであるし、連合は、グループ間で、その同じ自律を尊重するはずである。組織には自由の保証が欠けていないことを警戒しよう。すべては、そうではないことを証明している。

例をあげよう。フランスのアナキストたちのいくつかの新聞があるが、それらは、思想が、文体が、あるいはもっと単純に人柄が、不幸にして定連の編集者たちの気に入らない人々すべてに対して、紙面を閉ざしている。結果として、その編集者たちは、同志たちの意見と表現の自由を制限する、個人的な権力を授けられている、ということになる。もしこれらの新聞が、あれこれの個人の、個人的な所有であるかわりに、集団に属しているとしたら、事情は変わったものになったであろう。その時、あらゆる意見は、そこで自由に対決されえただであ

人は、権威について、権威主義についてよく語る。しかし、その点については、理解し合う必要がある。社会の中で経済的隷属を維持すること以外の目的を持たない、国家の中に形象化されている権力に対しては、われわれは、全精神をあげて抗議するし、反抗することを止めないであろう。しかし、経験に、知性に、ないし才能に由来する、純粹に精神的な権威がある。そして、われわれアナキストたち、われわれのうちの誰一人として、この権威を尊重しないものはない。

「組織主義者」、連合主義者たちを、権威主義者と考えるのは誤りである。そして、「反組織主義者」、個人主義者を、強いて徹底して孤立するものとして考えるのも、より軽いとはいえない、もう一つの誤りである。くり返していえば、私にとって、個人主義者と組織主義者の間の争いは、単なる言葉の争いであり、それは、事実の綿密な検討の前では耐えられない。では、実際の現実の中に、われわれは何を見るか？ それは、「個人主義者」は時には「組織主義者」よりもずっとよく組織される、ということであり、というのも組織主義者は、組織を具体化することなく、あまりにしばしば、組織を奨励することしかしないからである。一方、普通権威主義者と見られて人々の中よりもずっと甚だしい事実上の権威主義が、声高に「個人の絶対的自由」を採用する集団の中に見られる、ということも起きる。というのもそれが、執行部を持ち、決定するからである。

いいかえれば、組織主義者にせよ反組織主義者にせよ、すべてが組織し合うのである。「組織しないでいられるのは」何一つしない人々か、孤立の中で生きることができ、それに満足しうる、取るに足らぬ人々でしかない。ここに真実がある。なぜ、それを認めないのか？

私の主張することの確かな証拠がある。イタリヤでは、現に闘争中のすべての同志たちは、「個人主義者」も「組織主義者」も、私の名を援用する。そして私は、みなもつともだと思っている。なぜなら、彼らの間の理論的相違がどのようなものであれ、みな同等に、共同活動を実践しているからである。

言葉の争いはくたばれ、行為だけにしておこう！言葉は分裂させ、行動は統一させる。今や、社会的な出来事に有効な影響力を及ぼすために、われわれがみな一緒に仕事にとりかかるべき時である。われわれの一人を死刑執行人の魔手からのがれさせるために、われわれはわれわれ以外の諸党派に話しかけねばならなかった、と考えるのは私には辛いことである。もし、強力な恐れられるインターナショナルに結集したアナキストたちが、スペイン政府の犯罪的な汚辱に対して、自ら世界的な抗議をなしたならば、フェレルは、その自由を、フリーメーソンやブルジョア自由思想家たちに負うことはなかったであろう。

したがって、アナキスト・インターナショナルが逆に現実のものとなるよう努力しよう。われわれが速やかに実践的な考察からでている。

クリスチャン・コルネリセン——個人の概念以上に相対的なものは何一つない。個人それ自体は、現実の中に存在しない。そこにわれわれは、つねに他の個人によって制限された個人を見る。個人主義者たちは、事実の上でのこの制限をあまりにも忘れていた。そして、組織の大きな恩恵はまさしく、他人の権利と個人的な発展への個人の権利を一致させるよう個人を慣らしつつ、その制限について自覚的な個人とすることであろう。

G・レインターズ——私もまた、組織に敵意を抱くものではない。それに、心の底で組織に好意的でないアナキストは一人もない。すべては、組織が構想され、設立される、仕方にかかっている。そこで何よりも避けるべきものは、それは、大立者たちである。オランダでは、たとえば、現存の連盟はみな満足させるところではない。それに賛成しない人々は、そこに入りさえしなければよい、というのもつともである。

エミール・シャブリエ——私は、演説が、より長くなく、より実質的であることを要求する。昨夜マラテスタによって行なわれた、問題をあげ尽くした演説以来、組織のために、あるいはそれに反対して、誰一人、新しい論拠

すべての同志たちに訴えることができるために、反動に對して闘うために、望む時に、革命的な発意による行動をするために、わがインターナショナルは存在しなくてはならない！

マックス・パギンスキー——あまりにもしばしば犯された重大な誤り、それは、個人主義はあらゆる組織を拒否する、と考えることである。それら二つの言葉は、反対に、切り離しえないものである。個人主義は、より特殊的には、個人の、精神的な、内的な解放に向かつての努力を意味する。組織は、到達すべき目標のためか、満足するための経済的必要による、意識的な個人の間での提携を意味する。それはともかく、革命組織は、特に精神的な意識的な個人たちを必要としていることを、決して忘れないことが重要である。

アメデー・デュノワ——私は、私は議論を、曖昧な抽象的な思想の天空から、いくらか相対的な、正確な、具体的な思想の堅い大地へと、下させようとしたのだ、と確認する。クルワセは反対に、私がそこでそれを追うことを拒否する、天空へ、神秘的な高度へ、議論をまた、押し上げた。

私が大会で可決されるよう提案している動議は、完全な発展への個人の権利についての、思弁的な思想から着想をえてはいない。それは、宣伝と闘争の努力が組織されたをもたらさなかった。権威について、あるいは自由について語る前に、これらの言葉の意味について理解し合うことは賢明なことであろう。たとえば、権威とは何か？もしそれが、実際に有能な人々がある集団の中でいつも与えている、あるいは与えるであろう影響力を意味するならば、私はそれに反対していべきものは何一つない。しかし、われわれの間でせひとも避けねばならない権威、それは、いくらかの同志たちが、あれこれの人物に盲目的に従うという事実に由来する権威である。そこには危険がある。それを避けるために、私は、創立される組織が指導者や総括委員会を認めないことを要求する。

エマ・ゴールドマン——私は、すでに述べたように、組織に賛成である。ただ私は、デュノワの動議の中で、集団的行動と並んで、個人的行動の正統性がはっきりと確認されることを望みたい。したがって私は、デュノワの動議への修正案を提出する。

エマ・ゴールドマンは、彼女の修正案を読みあげる。それはデュノワによって承認され、ついで簡略化された言葉でデュノワの動議に挿入される。

I・I・サムソン——ここ、オランダには、自由共産主義者の連盟が存在し、私はそれに加盟している。さつき、同僚のレインターズがいったように、多くの同志た

ちがそれに加わることを拒否した。原則についての理由のためか？ そうではない。単に人の問題による。われわれは、誰も排除してはいないし、排除したことも決してなかった。われわれは、個人主義者たちの加入にすら反対しない。だから、もし彼らが望まれるなら、われわれの下に来るように。実をいえば、私は、組織の形がどのようなものであれ、彼らはいかにその中では不満を持って振舞うであろう、と認めないわけではない。それは生来からの不満なのである。そして、彼らの批判にあまりに乱されるべきではない。

K・ポブリジエック——デヌノワの動議は、アナキスト組織が帯びなければならない性格について何一ついいない。私は、それが、その性格を明らかにした付記、マラテスタが私とともに署名することに同意した付記、によって補われることを要求する。

(ポブリジエックはこの付記を読む。それは次ページに見られる通りのものである)

討議は終わる。上程された動議についての投票へと移る。それは二つあった。一つは、エマ・ゴールドマンによってほんの少し修正され、ポブリジエックとマラテスタによって補われた、デヌノワのものであり、もう一つは、同志ビエール・ラムスのものである。

は、精神的な、経済的な、あらゆる条件を変えることを目的とし、その方向にそって連合は、すべての適切な手段による闘争を支持する。

ビエール・ラムスの動議

アムステルダム・アナキスト大会は、すべての国のグループに、各種の地理的区分によって、地区的な、地方的な連合に結集することを提案する。

われわれは、われわれの提案は、アナキズムの原則そのものから着想をえている、と宣言する。なぜなら、われわれは、集団なしには、個人的な発意と行動の可能性はないと考えるからであり、われわれの固い決意によって結成された集団は、各個人に、その自由な発展への実際のな場を供給するであろうからである。

連合的組織は、アナキストのプロレタリアートに最もふさわしい形である。それは、現存するグループを、新しいグループの加入によって増大する一つの有機体に結集する。それは、反権威主義的であり、グループや個人に対して義務的な決定を下す、いかなる中央立法権力をも認めない。グループや個人は、われわれの共同の運動の中で自由に発展する、いかなる命令ないし妨害もなしにアナキスト的な経済的な方向で行動する、権利を認められていて、連合は、いかなるグループも排除しないし、各グループは、それが必要と認めるとき、脱退し、払込み金を引きあげることが自由である。

デヌノワの動議

一九〇七年八月二十七日、アムステルダムに参集したアナキストは、

アナキーと組織の思想は、人がしばしば主張するようには相容れないものであるどころか、相互に補い合い、照らし合うものであり、アナキーの原則は、生産者たちの自由な組織の中にある、ことを考慮し、

個人的行動は、それがどのように重要なものであろうと、集団的行動、一致した運動の欠如を補いえず、また、集団的行動は個人的発意の欠如も補いえない、ことを考慮し、

闘う力の組織は、宣伝に新しい飛躍的な発展を保証するであろうし、労働者階級の中に連合と革命の思想の浸透を促進させるであろう、ことを考慮し、

利害の一致にもとづく労働者組織は、渴望と思想との一致にもとづく組織を排斥しない、ことを考慮し、すべての国の同志は、アナキスト・グループの創設と、すでに結成されているグループの連合との、具体化に着手すべきである、と考える。

ポブリジエック・マラテスタの付記

アナキストの連合は、グループと個人の提携であり、そこでは、誰も自分の意志を強制することも、他人の発意を弱めることもできない。現行社会を前にして、連合

われわれはさらに、仲間たちに対し、自分たちそれぞれの運動の必要性に応じて、グループを作ること、そしてまた、全国的な、国際的なアナキスト運動の力は、国際的な基礎でのその組織化にかかっていること、解放の手段は、一致した国際的な行動からしか由来しないこと、を忘れないこと、を強く勧める。すべての国の仲間たちよ、自治的なグループに諸君を組織しよう。諸君を唯一の国際的連合、アナキスト・インターナショナルに結集しよう。

これらの動議は、フランス語、オランダ語、ドイツ語で読まれたあと、投票に付された。

デヌノワの動議は、四十六票を獲得した。ポブリジエックの付記は、四十八票である。反対投票としては、ただ一つの手が動議に反対してあげられた。付記には、いかなる反対もなく、付記は、結局、満場一致の投票を集めた。

ラムスの動議が、ついで投票にかけられた。賛成十三、反対十七であった。多くの大会参加者は、ラムスの動議は、票決されたばかりの動議に何一つ付け加えるものではないとの理由から、棄権を表明した。

雑誌「自由なページ」の報告は、大会によって行なわれた議決の重要性を、次のように強調している。

「アムステルダムでのこの決議は、まったく重要性がない、というものではない。以来、われわれの敵、社会民

主義者たちが、われわれを社会主義から追放するため、別な形で告発をすることなく、あらゆる種類の組織へのわれわれの古くからの憎悪を援用することは、もはや可能ではなくなるであろう。アナキストの伝説的な個人主義は、アムステルダムで、アナキストたち自身によって公的に葬られた。われわれの敵手のいく人かのいかなる悪意も、それを生き返らすにいたることはできないであろう」

叛逆の権利についての声明（八月三十日、金曜日）

エマ・ゴールドマンが起ち上がり、アナキストの大会が、最も広い意味で承認される叛逆の権利のために声明しないのはおかしい、と発言する。彼女は、同志バギンスキーがともに署名した、次の声明を読みあげる。

アナキスト国際大会は、個人による、また大衆全体による、叛逆の権利のために声明する。

大会は、叛逆の行動は、特にそれが国家と金権政治の代表者に対して向けられる時、心理学的見地から考察されねばならない、と考える。それは、われわれの社会の不正の恐るべき抑圧によって個人の心理に加えられた深刻な影響の結果である。

最も高貴な、最も敏感な、最も微妙な精神こそが、内的な、外的な叛逆によって表明される、深刻な影響を受

けやすい、と法則としていうことができる。この観点から見て、叛逆の行動は、耐えがたい体制の社会心理学的結果として特徴づけることができる。そのようなものとして、その行動は、その原因や動機とともに、称讃されるか非難されるよりも、むしろ理解されるべきである。

ロシアにおけるように、革命的な期間を通じて、叛逆の行動は、その心理学的性格を考慮しなくとも、二つの目的に役立つ。それは、専制の基礎を侵蝕し、臆病な人の熱情を掻き立てる。それは特に、テロリストの活動が専制主義の最も兇暴な、最も憎むべき手先に対して向けられた時に、そうである。

大会は、この決議を承認しつつ、集団的蜂起への連帯とともに、叛逆の個人的な行動への同意を表明する。

投票に付されたゴールドマン・バギンスキーの声明は、満場一致で認められた。

マラテスタ、アナキスト・インターナショナルと戦争

一九一五年二月十五日、以下にかかげる宣言が発表された。それは、各国の有名な絶対自由主義者三十五名の署名が付されており、その中には、エツリコ・マラテスタ、アレクサンドル・シャビロ、アレクサンドル・ベルクマン、エマ・ゴールドマン、ドメラ・ニューヴェンフェイス、等々の名が見られる。マラテスタとシャビロは、一九〇七年のアナキスト国際大会で選出された、インターナショナル事務局の五名の書記のうちの二名であった。もう一名の書記ルドルフ・ロッカーは、当時監禁されていたので署名することはできなかったが、彼もまた戦争には反対であった。

ヨーロッパは火中にあり、一億もの人間がかつて歴史に記録されたことのない、この上なく恐ろしい殺戮の中で闘っており、いく十億もの婦女子は涙にくれ、七つの偉大な国民の経済的、知的、精神的な生活は暴力的に停止せられ、脅威は新しい軍事的紛糾によって日に日に増している。そうしたものをこそ、文明世界がわれわれに呈示している、すでに五カ月にわたる、痛ましい、憂慮

すべき、醜悪な光景である。

しかし、それは、少なくともアナキストによっては、待たれていた光景である。

なぜなら、彼らにとっては、戦争は現行社会機構の中で恒常的に準備されているものであり、局部的な、あるいは全般的な、植民地における、あるいはヨーロッパでの、武力紛争は、市民の経済的不平等を基礎とし、利害の野蛮な対立にもとづき、政治的権力とともに経済的な力をも持っている寄生的な少数者による、厳格な苛酷な従属の下に働く人々をおいている、そうした制度の、自然な帰結であり、宿命的な、必然的な結末である、ということは決して疑いえないことであったし、——今日の恐るべき出来事は、この確信を強めた——現に疑いえないことである。戦争は避けがたいものであった。それゆえに、戦争は勃発しなければならなかった。半世紀来、この上なく法外な軍備を熱狂的に準備したこと、日に日に死の予算を増大させたことは、無駄ではなかったわけである。たえず軍需品を改良しようとし、始終すべての精神とすべての意志とを軍事体制の最善の組織に向かわせようとされたので、人々は平和のためには動かなかった。

したがって、紛争の原因と機会とが増加したあとで、あちこちの政府の責任を明らかにしようとするのは、素朴な、子供っぽいことである。攻撃的戦争と防衛的戦争との間に、可能な区別はない。現在の紛争の中で、ベル

リンとウィーンの政府は、パリとロンドンとベドログラードの政府に劣るものではない公正な文書によって、自己を正当化している。前者であれ後者であれ、自分の善意を明らかにするための、権利と自由の純潔な防衛者、文明の擁護者として自分を呈示するための、最も論議の余地のない、最も決定的な文書を提出するものが、自己を正当化しうるのである。

文明？ では現在、それを代表しているものは誰なのか？ それは、あらゆる叛逆の動きを庄殺したほど強力な、恐るべき軍国主義を持つドイツ国家なのか？ 答刑と絞首台とシベリアとがその唯一の脱得の手段であるロシア国家なのか？ アルジェリア囚人部隊、トンキンとマダガスカル、モロッコの血腥い征服、黒人部隊の強制徴募を伴うフランス国家、何年にもわたって、単に戦争に反対して書き、語っただけで犯罪人として同志たちを投獄しているフランスなのか？ その巨大な植民帝国の住民たちを、搾取し、分裂させ、飢えさせ、虐待しているイギリスなのか？

そうではない。誰も正当防衛の状況にあると公言する権利を持たぬように、誰も文明を援用する権利を持ってはいない。

真実、それは、戦争の原因、現にヨーロッパの平野を血で汚している戦争の原因は、それに先立つすべての戦争と同様に、単に、特権の政治的形態である国家の存在の中にある、ということである。

ものであれ、アナキストの役割は、解放の戦争はただ一つしかないこと、つまり、あらゆる国において、被抑圧者が抑圧者に対して、被搾取者が搾取者に対して向ける戦争しかないことを、宣言しつづけることである。われわれの役割、それは、主人たちに対する叛逆へと奴隷たちを起したしめることである。

アナキストの宣伝と行動は、各種の国家を弱体化させ解体させることに辛抱強く専心すべきであり、また諸国民や各軍隊の中で叛逆の精神を開拓し不満を生じさせることに専心すべきである。

正義と自由のために闘っていることを確信しているすべての国の兵士たちみんなに、われわれは、彼らの英雄主義と勇敢さは、憎悪と圧制と悲惨とを永続化することにしか役立っていないことを、説明しなくてはならない。

工場の労働者たちには、彼らが今手に持っている銃は、ストライキや正当な叛逆の日に、彼らに向けて使われたものであることを、そして、ついで銃は、彼らに経営者の搾取を忍ぶことを強いるために、さらに彼らに向かって用いられるであろうことも、思いださせなくてはならない。

農民には、戦争のち、改めてまたくびきの下に屈従し、旦那方の土地を耕し、金持を養いつづけなくてはならないであろうことを、示さなくてはならない。

すべての難民に対しては、彼らの抑圧者たちをやっつ

国家は、軍事力から生まれた。それが自分の全能を維持するために論理的に依拠しなければならないのは、軍事力である。それが夢みている形がどのようなものであれ、国家は、特権を持つ少数者のための組織された圧制である。現在の紛争は、そのことを一目瞭然たる形で物語っている。国家のあらゆる形態が現在の戦争の中に加わっている。ロシアの絶対主義、ドイツの国会議員によって緩和された絶対主義、オーストリアのきわめて異なった民族からなる国民を支配する国家、イギリスの立憲民主主義制度、フランスの共和制民主主義制度。

平和を深く望んでやまなかった諸国民の不幸は、戦争を避けるために、陰謀的な外交をする国家を、(議会主義的の社会主義のような野党も含め)民主主義と政党とを、頼みとしたことである。この信頼は故意に裏切られ、そして、諸政府が、あらゆる彼らの言論機関の助けをえて、こんどの戦争は解放の戦争である、とそれぞれ国民を納得させた時、信頼はさらに裏切られつづけたわけである。

われわれは、諸民衆間のあらゆる戦争に断乎として反対する。そして、諸政府当局者たちが、戦争の坩堝の中に新しい民衆をさらに投じようとしているイタリアのような中立諸国においては、わが同志たちは、全精力を賭して、戦争に反対してきたし、反対しているし、つねに反対しつづけるであろう。

現在の悲劇の中でおかれている場や状況がどのような

ける前に、彼らのための土地や工場を奪う前に、彼らの武器を開放してはならない、と告げなくてはならない。

増大する悲惨と窮乏の犠牲者、母たちや妻たちや娘たちには、彼らの苦しみと、彼らの父や息子や夫の虐殺の真の責任者は誰か、を示そう。

われわれは、反乱を誘発させるために、それによってわれわれがいっさいの社会的不正の終末を期待している革命を組織するために、あらゆる叛逆の動きとあらゆる不満とを利用しなくてはならない。

現行の戦争のような災禍を前にしても、意気沮喪するな！ いく千もの人々が一つの思想のために英雄的に生命を捧げている、乱れた時期にこそ、われわれは、アナキストの理想の、寛大さを、偉大さを、美しさをそれらの人々に示さなくてはならないのである。すなわち、生産者の自由な組織によって実現される社会正義、永遠に廃止される戦争と軍国主義、国家とその強制権の機構の完全な破壊によって獲得される完全な自由を。

アナキー万歳。

(三十五名の署名がつづく)

反対の方向で、一九一六年の春、クロボトキン、チェルケイン、ジャン・グララヴ、シャルル・マラト、クリスチャン・コルネリセン、ポール・ルクリュ(エリゼの息子)等々を含む、他のアナキストたちは、戦争賛成の声明を公表する。そ

これは、フランス政府から補助金を受けていた、いかがわしい新聞「サンジカリストの闘い」紙上に、フランスで印刷に付された。この声明は、実際には十五人の署名者しかなかったにもかかわらず、「十七人宣言」の名の下に有名になった。それは、五月に、無政府共産主義者たちの抗議を受けることとなった。抗議の結論は次のとおりである。

われわれは声明する。諸民衆間の戦争を「終わりまで」つまり、戦う同盟国の一方の「勝利まで」つづけるためのあらゆる宣伝は、基本的に国家主義的な、反動的な宣伝である。その宣伝を正当化し説明しようとする目的は、まったく幼稚なものであり、甚だしく誤ったものであり、いささかの歴史的ないし論理的な批判にも抗することができないものである。アナキズムとも反軍国主義とも、インターナシヨナリズムとも何ら共通するものがない、そうした宣伝は、反対にその本質においても、その実際のな結果においても、軍国主義の、「民主的」と称する国家的国家主義の、一種の宣伝を表現するものである。こうした誤りに反対して、労働者の重大な利益に絶対に反するこうした思想に反対して、断乎として闘うことは無政府共産主義者の絶対的な義務である。したがって、われわれは単に以後「声明」の署名者たちを闘争の同志とみなしえないだけでなく、彼らを、無意識的なものであるが労働者の利益の現実の敵と、断乎としてみなさざるをえないものである。

予言者の手紙

ルイジファブリに

親愛なるファブリよ。

（ロンドン、一九一九年七月三十日）
君の心をそれほど奪っている問題、つまり「プロレタリアートの独裁」の問題について、われわれは完全に一致している、と僕には思われる。

僕は、この問題について、アナキストの意見は何ら疑いえないものだ、と思っている。事実、ポリシェヴィキ革命の前ですら、それは決して誰からも疑われたことはなかった。アナキーは、政府のないことを意味している。したがって、いわば、独裁のないこと、監督のない、憲法による制限のない、絶対的な政府を意味するものがないこと、を意味している。しかし、ポリシェヴィキ革命が起きた時、われわれの友人たちは、既存の政府に対する革命であったものと、革命を抑制しそれを一党の特殊な目的に導くために、革命を支配したばかりの新政府を代表したものとを、混同したように見える。そんなふうにしてわれわれの友人たちは、ほとんどポリシェヴィキ自身となった。

今、ポリシェヴィキたちは、彼らの師匠であり模範であった、君も知っている結末を迎えた、ゲード、プレハノフ、ハインドマン、シャイデマン、ノスケ等々とは反対に、ただ誠実な良心的なマルクス主義者としてとどまっている、マルクス主義者たちである。われわれは、彼らの誠実さを尊敬しているし、われわれは、彼らの精力に感嘆している。しかし、われわれが理論的な面で決して彼らと一致したことはなかったように、われわれは、理論から実践へと移った時も、彼らと連帯することはできないであろう。

しかし、真実はおそらく単純にこうである。つまり、ポリシェヴィキ化したわれわれの友人たちは、「プロレタリアートの独裁」という表現によって、土地と生産手段とを占有し、生産者を搾取し抑圧する階級のための場がそこにはない、生活の様式を組織し、社会を建設しようとする、労働者の革命的事実を、単に理解しているの

である。
そんなふうに理解された「プロレタリアートの独裁」は、反動の抵抗が終わった時には、誰ももはや自分のために服従し働くように力で大衆に強制しえない時には、資本主義社会を打倒しようとした、全労働者たちの有効な権力であろう。したがって、アナキーになるであろう。プロレタリアートの独裁は、全員の独裁を意味するのである。すなわちそれは、全員の政府が、この言葉の歴史的な、実質的な意味、権威主義的な意味では、もは

や政府ではないのとまったく同様に、もはや独裁ではないであろう。

しかし、「プロレタリアートの独裁」の真の信奉者たちは、そんなふうにそれを理解してはいない。彼らはロシアでそれを如実に示している。プロレタリアートはそれに、民衆が民主的な制度に参加しているように、参加しているが、要するにそれは事態の真相を隠すためのものである。現実には、一党の、あるいはむしろ、一党の指導者たちの、独裁がある。それは、その政令、刑罰を持ち、その死刑執行人を持ち、特に、今日では外敵に対して革命を擁護するために役立っている独裁であり、しかし明日は労働者たちに独裁者たちの意志を強制するために、革命を抑制し、形成されつつある新しい利害関係を強化するために、そして、大衆に対して新しい特権階級を擁護するために、役立つであろう武力を持つ、真の独裁である。

ボナパルト将軍、彼もまた、ヨーロッパ反動に対してフランス革命を擁護するのに役立った。しかし彼は、擁護しつつその息の根をとめたのである。レーニン、トロツキー、その同志たちは、確かに誠実な革命家である……。そして彼らは裏切らないであろう。しかし彼らは、やがて革命を利用し、それを台なしにするために来るであろう人々に役立つ、政府幹部を養成している。彼ら、彼らこそ自分らの方式の最初の犠牲者となるであろう。そして僕は、彼らとともに革命もまた崩壊するであ

ろうことを怖れる。

歴史は、必要な変更を加えて、くり返す。ロベスピエールをギロチンに導き、ナポレオンへの道を用意したの

は、ロベスピエールの独裁である。
 以上のようなものが、ロシアの状況についての全般的な僕の考えである。われわれが受けた特別の知らせについていえば、それらは判断をあえてしるにはまだあまりにもまちまちであり、あまりにも矛盾している。われわれには望ましくないとと思われる多くの事柄が、状況の産物であり、ロシアという特殊な事情の中では、彼らが行った以外のことをする手段がなかった、ということもありうる。われわれがいうことがロシアでの事実の発展に何らの影響も与えず、反対にイタリアで悪く解釈され、そこで反動に有利な中傷に呼応する印象を与えうる以上、待つことが最善の策である。

- 1 「アジタツィオーネ」アンコーナ、一三、一四号、一八九七年六月四、一日。
- 2 「アナキーと組織」、一九二七年、一九六七年再版。
- 3 「アナキー」(一八九二年)よりの抜萃。一九〇七年にイタリア語から翻訳、一九二九年再版。
- 4 ヴィクトル・セルジュ「アナキストの思想」、「白砲」一九三八年一月号。
- 5 レーニン「国家と革命」(岩波文庫、宇高基輔訳)

6 ポール・ドレザルについては、八四ページを見よ。

7 Eugène Fournière (1857—1914) 元宝石細工職人、ギユスターヴ・ルブネとともに「社会主義雑誌」の創刊者、パリ市会議員、代議士、労働の歴史を教えた。彼の著書「社会主義の危機」より抜萃。

8 Benoit Malon (1841—1893) フランスの社会主義者、「完全な社会主義」の著者。

9 Gustav Rouanet (1855—1927) 政論記者、一八九三年から一九一四年までセーヌ県の社会主義者代議士。「小共和国」(一九〇六年七月十五日)より抜萃。

10 Ferdinand Domela Nieuwenhuis (1846—1919) オランダのアナキスト、革命的・絶対自由主義的社会主義者となつた元ルーテル派牧師、ゼネラル・ストライキの唱道者。「危機に瀕した社会主義」(一八九四年)、「絶対自由主義的社会主義と権威主義的社会主義」(一八九五年)の著者。

11 Vladimir Tchekessoff (1854—1925) グルジア生まれのロシアのアナキスト、一八九一年にロンドンへ亡命する。クロボトキンとマラテスタの友人。反マルクス主義者、革命的サンジカリズムの信奉者。「社会民主主義の教義と行動」の著者。バクニン、クロボトキン、マラテスタ、ルクリュ、等々の翻訳者。Annicare Cipriani (1844—1918) 絶対自由主義的なイタリアの革命家、シチリア島遠征の際のガリバルディの元僚友、一八六四年に第一インターナショナルの創立にロンドンで参加、パリ・コミューンにも加わつた。

12 Jean Grave (1854—1939) 労働者出身のフランスのアナキスト、ジュネーヴで「叛逆者」を、ついでパリで「新時

- 代」を編集した。特に、「革命後の社会」(一八八二年)と「死にかけている社会とアナキー」(一八九三年)の著者。後者の本のために起訴された。——Fernand Pelloutier と Emile Pougnet のついでに、六三ページおよび六九ページを見よ。——Joseph Tortier (1854—1925) 指物職人、ルイズ・ミンセル、エミール・ブージェとともに、失業と財産家に反対する直接行動に参加、一八八四年にアナキストとなる。ゼネラル・ストライキと選挙権、欲求にしたがっての消費の序曲としてのパンと住居と衣服の無料化の唱道者。
- 13 Jean Jaures (1859—1914) 共和主義と社会民主主義の指導者、ジャーナリストで歴史家、第一次世界大戦直前に暗殺される。
- 14 Gustave Delory (1857—1925) 労働者出身、フランス北部の初社会主義闘士の一人、一八九〇年五月一日のストライキの時に逮捕される。一八九六年にリール市長に、さらに県会議員、そして一九〇二年に代議士に選出される。
- 15 Jules Guesde と H. M. Hyndman のついでに次のページを見よ。
- 16 Alexandre Millerand (1859—1943) 改良主義的社会主義者、一八九九年に大臣となる。一九二〇年から一九二四年までフランス共和国大統領。
- 17 Henri van Kol (1852—1925) オランダの社会民主主義者の代議士、植民地問題が専門、リネンズイの名でだした、小冊子「アナキズム」(一八九三年)の著者。
- 18 August Bebel (1840—1913) ドイツ社会民主党の創立者の一人。
- 19 Liebknecht については、I 卷一〇三ページを見よ。

20 Keir Hardie (1856—1915) イギリスの元鉱夫、左派の労働黨員、一八九三年における独立労働党の創立者。

21 デュノワと称した Amedée Catinet (1878—1944) は、絶対自由主義的な形成をへたや、権威主義的社会主義の方へと変わつてゆく。一九一四年に社会主義者の新聞「エマニテ」に入る。一九一四年に、ツィンメルヴァルドクのインターナショナル会員集会に参加、ツールの分裂のちフランス共産党の黨員となる。「エマニテ」の絵書記。ついで、SFIO に戻り、そこで彼は、ジャン・ジロムスキーとともに、「社会主義者の戦い」派に加わる。

22 Hyman Croiset、個人主義的アナキスト、シュティルナー(I 卷一五ページを見よ)の弟子、一九二〇年に、阿姆斯特ダム劇場でストライキを組織する。「オランダでの自由思想運動」の著者。

23 Siegfried Nacht (1878—1956) ガリシア(ポーランド)出身のユダヤ人、アナルコ・サンジカリスト。スイス、スペイン、アメリカ合衆国で暮らし、アメリカで死んだ。「直接行動とゼネラル・ストライキ」を著してゐる。

24 I 卷三五—三六ページを見よ。——Emma Goldman については、I 卷三二—三四ページを見よ。——ユヘル・ラムヌと、本名 Rudolf Grossmann (1882—1942) オーストリアのアナキスト、第一次世界大戦前、アメリカ合衆国とロンドンで暮らした。一九〇四年にヨーロッパに戻る。オーストリアに革命的サンジカリズムを導入する。カール・リープクネヒトの傍らでの、反軍国主義の普及者、ドイツが魚雷攻撃をした船上で、戦時に死ぬ。

25 Henrik Ibsen (1828—1906) 個人主義的なノルウェーの劇作家。ストックタン博士は、彼の戯曲の一つ「民衆の

- 敵(一八八二年)の主要な登場人物、強力な社会的グループに対して闘っている孤独な人。
- 26 Francisco Ferrer (1859—1909) スペインの自由思想家、自由の教育訓練システムの創案者、カトリック教会から憎まれ、教会によって革命的陰謀に荷担したと自白を強いられる。一九〇九年に、モンフィク要塞の中で銃殺に処せられる。
- 27 Max Baginsky (1864—1943) ドイツ社会民主党の党員、(い)でアナキストとなり、一八九三年にアメリカ合衆国に亡命する。
- 28 Christian Cornelissen (1864—1943) オランダの絶対自由主義的社会主義者、ドメラ・ニューヴェンフェユスの友人で協力者、彼とともに新聞『万人のための法』を編集する。彼の国におけるサンジカリズムとゼネラル・ストライキの理論家で組織者、フランスに亡命し、生涯を終える。そこで彼は、サンジカリストの新聞に協力する。
- 29 I. I. Samson 一九〇三年のゼネラル・ストライキ期間中活動的であった、オランダのアナキズム普及者、一九〇五年に新聞『自由な共産主義者』の編集者、ずっとのちに社会党の党員となる。
- 30 傍点の部分がエマ・ゴルドマンの修正を要約している。
(ポール・ドレザルの注記)
- 31 Rudolf Roeker (1873—1958) ドイツのアナキスト哲学者、歴史家。アメリカ合衆国で死ぬ。特に、『ロシア国家共産主義の破産』(ドイツ語、一九二一年)の著者。
- 32 Charles Malato (1857—1938) アナキスト著作家、特に『アナキエの哲学』(一八八九年)の著者。 Paul Rectus エリゼ・ルクリュ(一巻三二三ページを見よ)の息子。
- 33 Luigi Fabbrì (1877—1938) イタリアのアナキスト著作家であり闘士。『独裁と革命』の著者。
- 34 35 Jules Guesde (1845—1922) アナキストであったのち、フランスへのマルクス主義の導入者となった、社会主義主義の指導者。 Georges Plekhanoff (1856—1918) 亡命マルクス主義者となった、ロシアの民衆主義者。ロシアへのマルクス主義の導入者、レーニンの師であり協力者。一九一七年にボリシェヴィキによる権力奪取を非難するため、レーニンから離れる。 Henry Hyndman (1842—1921) イギリスへのマルクス主義の導入者であったのち、労働党路線の創始者。 Philippe Scheidemann (1864—1935) 一九一九年にドイツの社会民主主義者の総理大臣。 Gustav Noske (1868—1946) 右翼の社会民主主義者、一九一八年にキールの知事、一九一九年初め人民委員反革命評議会に入る。のちに軍事大臣、戦艦の革命運動の抑圧を組織する。

エミール・アンリ 1872—1894

エミール・アンリ(一八七二—一八九四年)は、他のアナキストのテロリストたちとは反対に、知識人であった。彼は、J・B・セー校で給費生として輝かしい勉学の日を送る。そこで教師の一人は、「人の出会いうる最も誠実な、完全な子供」として彼を描いている。この教師は、アンリに理工科大学学生の制服をぜひとも着せたいと熱望していた。しかし、彼は、「軍人にならないために、フールミにおけるように不幸な人々を撃つことを強制されないために」それを拒否した。

彼の父、フォルチネ・アンリは、パリ・コミュニケーション派に加わって闘った。欠席裁判で死刑を宣告された彼は、敗北に引き続いた弾圧からのがれるのに成功し、スペインに亡命し、そこで二人の息子が生まれる。彼は、休戦のあと、やっと一八八二年にフランスに戻る。のちに彼は、新聞『アンドオール』に寄稿する。

一八九四年二月十二日、午後九時、一人のプロンドの青年がサン・ラザール駅にある、カフェ「テルミニユス」に入った。空いていた小円卓に坐ったアンリは、外套のポケットから爆薬

を詰めた小さな白い鉄の鍋を急にとりだし、それを空中に投げた。それはシャンデリヤにぶつかり、爆発し、いくつかの大理石のテーブルとともにいっさいのガラスを粉々にした。みなわれ先にと逃げた。二十人ばかりの負傷者がで、その一人は傷がもとで死にいたった。

エミール・アンリは逃げだし、一人の警官とカフェの給仕一人に追われる。さらに一人の鉄道員が彼らに加わり、アンリはその鉄道員を撃つ。しかし撃ちそこなう。いくら離れたところで、彼は捕えられる前に警官に重傷を与える。

重罪裁判所の審問で、彼は峻烈な応酬をする。

重罪裁判所の裁判長——あなたは……われわれが今日血にまみれているのを見る……その手を延したのだった。

エミール・アンリ——私の手は血にまみれている、あなたの赤い法服のように。